

はじめに



この研究報告書は、人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として」（略称：環境意識プロジェクト）の一環として、研究対象地域である幌加内町において実施した一連の社会調査の報告である。具体的には、「朱鞠内湖周辺環境についての関心事調査」（2005年）、「朱鞠内湖の流域環境の価値についてのインタビュー調査」（2006年）、「朱鞠内湖周辺の自然環境に関する意識調査」（2007年）、「朱鞠内湖と森の将来を考える住民会議」（2008年）の研究成果を報告する。

地域の環境を、将来に向けてどのように利用し保全していくか。このことを考える主役は、地域の住民たちである。環境の将来像は、地域の特性をふまえつつ、人々が環境に対して抱く価値を最大限満足させるようなものとして、描かれなければならない。同時に、環境の専門家の役割も重要だ。環境の将来を考えるには、その環境の性質を十分に理解する必要がある。環境を開発するにせよ保全するにせよ、環境に手を加えれば、時には素人目には予想もつかないような環境影響が波及的に生じる可能性がある。環境の将来を考えるには、住民と専門家の共同が必要——このことはかなりの程度認識されるにいたっている。

しかし、この住民と専門家の共同は、意外と難しい。同じ具体的な環境を、専門家は専門用語（科学的言語）を用いて抽象し、住民は各々の関心や関与の在り方に応じて日常語を用いて抽象する。従来、住民と専門家の共同は、後者の専門用語（科学的言語）によって得られる知識を、前者にわかりやすく伝える形で行われてきた。しかし、今日の環境づくりにおいては、さらに進んだ形で住民と専門家が共同することが求められている。つまり、住民と専門家がそれぞれの言葉で抽象して表現している環境像を、対話を通じて一つの具体的な環境像へと上向させることが求められている。

住民と専門家の共同を支援する手法を作る試みの一つが、総合地球環境学研究所の「環境意識プロジェクト」である。正式名称を「流域環境の質と環境意識の関係解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として」と称するこのプロジェクトは、文字通り、自然科学の目から捉えることのできる流域環境の質と、人々がその環境に対してもつ意識や価値との関係を明らかにすることのできる手法の開発を目的としている。そして、その手法を、環境アセスメントや環境づくりにおける住民参加に活用することを目指している。

この目的を達成するために、環境意識プロジェクトは、応答予測モデル班と社会調査班（IDEA 検討班）を車の両輪として研究を進めてきた。応答予測モデル班は、環境の変化を定量的に予測するモデル群を開発する。社会調査班は、人々が環境に対してもつ価値を把握する枠組みを開発するとともに、応答予測モデル班による環境変化の予測を人々に伝え、それに対する人々の評価を解析する手法を開発する。

プロジェクトの主要な研究フィールドは、北海道雨竜郡幌加内町北部に位置する朱鞠内湖周辺の流域環境である。朱鞠内湖を研究フィールドに選んだ理由は、2つある。1つは、朱鞠内湖周辺には北海道大学の演習林が広がり、環境のデータが豊富で、自

はじめに

然科学的調査の体制も整っていることである。もう1つは、朱鞠内湖に目立った環境問題や住民間の対立などが生じていないことである。プロジェクトでは、あらゆる流域環境に適用できる汎用性の高い手法の開発を目標としていた。そのためには、なるべく政治色や社会問題色に染まっていない環境をフィールドにすることが望ましいと考えた。

以下、われわれが幌加内町で実施してきた社会調査の概要を述べておこう。社会調査は、永田素彦（三重大学、2007年より京都大学）とプロジェクト初代リーダーの吉岡崇仁（現・京都大学）が中心となって実施したが、同時に京都大学、三重大学の学生・院生が卒業研究、修論研究として携わってきた。

スタートは2004年。調査の開始にあたっては、幌加内町役場にプロジェクトへの協力を依頼し、さらに調査に協力してくれそうな方を何名かご紹介いただいた。スタートということで、まずはわれわれが朱鞠内湖や幌加内町について理解を深めることが重要と考え、幌加内の人々が朱鞠内湖やその森についてどのような関心や関わりをもっているのか、概要を把握するためのインタビュー調査を行った。あわせて、プロジェクトの主要な成果として計画されていたシナリオアンケートの試行版を実施した。2004年の調査には、京都大学（当時：以下同じ）の木村瑛美が、卒業研究として中心的に関わっている。

2005年は、朱鞠内湖とその森に対して住民がもつ関心や価値を系統的に把握するために、「朱鞠内湖周辺環境についての関心事調査」を行った。幌加内町と名寄市の人々を対象に、構造化面接法によるインタビュー調査を行った結果、朱鞠内湖や周辺環境の「水質」、「風景やレクリエーション」、「動植物の住みか」のはたらきに特に強い関心が抱かれていることが示された。2005年の調査には、京都大学の坂本泰彦と、三重大学の大川智船が、それぞれ卒業研究として中心的に関わっている。

2006年は、前年の関心事調査で明らかにした人々の朱鞠内湖の環境への関心をより深く理解するために、インタビュー調査を実施した。インタビューでは、「水質」を一つのキーワードに、朱鞠内湖への関わりやイメージについて自由に語っていただき、その中に現れた環境の価値についての言説を抽出し分類した。その結果、人々と自然との関係には、相互作用的關係と相互浸透的關係の2つのあり方があること、後者に由来する、いわば「価値以前の価値」が環境価値の基盤として重要であることが示唆された。2006年の調査には、京都大学の錦木孝介が、卒業研究として中心的に関わっている。

2007年は、応答予測モデル班と社会調査班のこれまでの成果をふまえて、シナリオアンケートを開発し、「朱鞠内湖周辺の自然環境に関する意識調査」と題して実施した。シナリオアンケートは、朱鞠内湖周辺におけるいくつかの森林伐採パターンを設定し、各伐採パターンに付随する環境の変化（シナリオ）に対して人々がどのように評価するかを分析し、人々がどのような環境の変化（悪化）と特に懸念しているかを明らかにするものである。シナリオアンケートは、環境意識プロジェクトの理念である住民と専門家の共同を、質問紙調査レベルで実現するものであり、このプロジェクトの中心的な成果の一つである。調査の結果、川や湖の水質を悪化させないような伐採パターンが特に選好されていることが示された。2007年の調査には、再び三重大学の大川

智船が、修士論文研究として中心的に関わっている。

2008年は、住民と専門家の共同という理念を、環境の将来像を策定する対面的な会議の場に具現する試みとして、「朱鞠内湖と森の将来を考える住民会議」を設計し、実施した。住民会議では、参加者たちが、専門家を活用しつつ、朱鞠内湖とその森の「10の将来像」を描き、採択した。2008年の調査には、京都大学の土屋智寛が、卒業研究として中心的に関わっている。

これら調査の実施には、上で名前を挙げた学生たち以外にも、多くのプロジェクトメンバーが関わっている。それぞれの調査に直接携わったメンバーは、各章の本文中で名前を挙げている。「朱鞠内湖周辺環境についての関心事調査」、「朱鞠内湖周辺の自然環境に関する意識調査」の質問票は、それぞれ、環境意識プロジェクトが実施した全国調査「環境についての関心事調査」、「森・川・湖の環境に関する意識調査」の質問票をもとに作成し実施した。これらの質問票は、吉岡崇仁リーダーを中心にプロジェクトメンバーによる数十回におよぶ議論を通して作成されたものである。すべてのメンバーを列挙することはしないが、特に中心的な役割を担ったメンバーとして、前者については総合地球環境学研究所の鄭躍軍氏、後者については早稲田大学の栗山浩一氏を挙げておきたい。また、「朱鞠内湖と森の将来を考える住民会議」の実施にあたっては、幌加内町の後援、および、北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットの協力を得た。記して感謝する。

最後に、これらの調査にご協力いただいた幌加内町の方々に厚くお礼を申し上げたい。幌加内町役場産業課には、幌加内での社会調査をはじめ以来、調査協力者の紹介、調査日程の調整、さまざまな関連資料の提供など、大いにお世話になった。漁業協同組合、観光協会にも、忙しい中何度も調査に応じていただいたほか、関連資料を提供していただいた。ほかにも、幌加内町の大勢の方々に、快く調査に協力していただいた。また、母子里の北海道大学雨龍研究林、名寄市の北海道大学森林圏北管理部の職員の方々にも、業務の合間をぬって、調査に協力いただいた。これらの調査をアレンジしていただいた雨龍研究林の吉田俊也氏、森林圏北管理部の柴田英昭氏にも感謝したい。最後に、幌加内調査の際の拠点である吉野家旅館には、宿泊だけでなく、朱鞠内湖や幌加内町のことを理解する上で多くの示唆をいただいた。こうした多くの協力がなかったら、われわれの調査がここで報告するような形で完了することはなかっただろう。重ねて感謝申し上げる。

2009年2月

総合地球環境学研究所 環境意識プロジェクト
京都大学大学院 人間・環境学研究科
准教授 永田 素彦
大川 智船